

木曾

五月 ツレ
従兵立衆 池田次郎
ツレ 木曾義仲
シテ 太夫坊覺明

シテツレ一聲「八百万。神も引きます魔の名の。弓矢の道こそ。

久しけれ。

ツレ木曾 「抑これは木曾義仲とは我事なり。

ツレ同 「扱も平家は越前の。燧が城を攻め落し。都合其勢十万余騎。此礪波山まで押寄する。

木曾 「身方は僅五万余騎。計略を以て防がんとて。

ツレ同 「白旗数多とゝのへつゝ。黒坂の上に押立てゝ。敵の心を疑はしめ。山中にたむろさせ。夜に入大手搦手より。一度にかかり俱利伽羅が。谷へ敵を落さんと。

上歌ツレ同 「用意をなして義仲は。く。勢を七手に別ちつゝ。その身は殊に精兵。一万余騎を引き従へ。埴生に陣をぞ。とりにけるく。

池田詞 「いかに申上候。御詫の如く黒坂の上に。多くの白旗を立てゝ候へば。平家の勢是を見て。あはや源氏大勢向うたるは。取こめられては適ふまじ。茲

は便宜の所也と。礪波山の山中。猿が馬場と申す所に陣をとつて候。

木曾 「夫こそ義仲が願ふ処なれ。さあらば矢合は明日たるべし。構へて身方を戒め戦はずして。夜に入つて押寄せうづるにて候。面々に其由申候へ。

池田 「畏つて候。

木曾 「いかに池田の次郎。

池田 「御前に候。

木曾 「是より北に当つて夏山のしげみの中に。朱の玉垣ほの見えて。かたそぎ造の社あり。あれをば何處と申すぞ。いかなる神を崇め奉りたるぞ。

池田 「さん候あれこそ埴生の八幡宮にて渡らせ給ひ候。此所も其御領の地にて候。

木曾 「義仲何とのう陣とりしに。八幡の御地なるこそ吉兆なれ。いかに覺明。

シテ 「御前に候。

木曾

「且は後代の為。一つは当時の祈禱の為。願書を参らせうと思ふはいかに。

シテ

「御詫の如く。御願書を御奉納あつて然るべう候。
木曾
「さあらば願書を書き候へ。

シテ

「畏つて候。覺明仰をうけたまはり。

同
「般の中よりも。く。小硯料紙取出し。墨すり筆を和しけるが。思ひ案ずる氣色もなく。古書を写すが如くにてやがて願書を書き終る。

願書

「何々歸命頂礼八幡大菩薩は。日域朝廷の本主。累世明君の曩祖たり。宝祚を守らんがため。蒼生を。利せんがために。三身の。金容をあらはして。三所の權扉を。おし開き給へり。爰に頻りのとしより以来。平相国といふ者あつて。四海をたなごゝろにし。万民を。脳乱せしむ是。仏法のあた。王法の敵なりそもそも。曾祖父前の陸奥の守。名を宗廟の。氏族に帰附す。義仲いやしくも。其後

胤として。この大功をおこす事。たとへば嬰児の
蠡を以て。巨海を測り蠻螂が斧をとつて。龍車に
向ふ如くなり。然れども君のため國のためにこれ
を起すのみなり。伏して願はくは。神明納受垂れ
給ひ。勝ことを究めつゝ。あたを四方に退け給へ
寿永二年五月日と。高らかに読み上げたり。

同「木曾殿を初めとして。其座に在りし兵ども。真に
文武の達者かなと。皆覺明をほめにけり。

木曾
「義仲表指抜き出し。

同「是を願書に取添へて。内陣に納めよと。覺明に賜
れば。覺明是を捧げ持ち御前を立ちてゆゝしくも。
八幡の宮に参りけりく。

シテ
「いかに申上候。御願書並に御表指の鏑。八幡の宮
に奉納仕りて候。又此の庄の土民。軍の御門出を
祝し。酒肴を奉りて候。

木曾
「斯る目出度き事こそなけれ。此度の軍に勝たんず

る事必定也。さらば軍の門出を祝ふべし。覺明酌に立候へ。

シテ「畏つて候。八幡の宮の神風に。

同「敵は木の葉と。散ぬべし。

木曾「いかに覺明一さし舞ひ候へ。

シテ「畏て候。

地「敵は木の葉と。ちりぬべし。(男舞)

同「酒宴も既に央ばなりしに。く。不思議や八幡の

方よりも。山鳩翼を並べつゝ。身方の旗手に飛び
翔り。納受のしるしを現はしければ。木曾殿を初
め。軍兵ども。皆一同に。伏拝み。愈々加護をぞ
願ひける。扱こそ平家の大勢を。俱利加羅が谷に。
追ひ落し。唯一戦に。勝利を得しも。まことに八
幡の。神力なり。